

## 記憶の風景

そこに到着した日より、津波による気が沈む場面ばかりを見てきた。外は寒かった。

なつかしい未来へ  
From the day I arrived here, I have seen only depressive scenes from Tsunami. The weather was cold.

空は分厚く、毎日が暗かった。そしてある日、小雨の後に太陽の光が海に反射した。

アーティストと巡る陸前高田、  
The sky was thick and dark everyday. Then one day, there was sunshine reflecting the sea after the drizzle rain.

そして大きな半円の虹が山の向こうに現れた。そして東北

And there came a big half circle rainbow right beyond mountains.

*Rikuzentakata Artist in Residence Program 2015*

## 挨拶

予てから述べていますが、弊社は、2011年3月11日の東日本大震災後、壊滅と言われた陸前高田市の復興をめざし同年9月に結成された会社です。100年後、200年後の子供達のために、地元で産業を興し、良い社会資本を残し、持続可能な町をつくるのが我々の使命です。

そんな中で展開していたアーティスト・イン・レジデンス事業も、皆様のご支援の下、お陰様で3年目を迎えることが出来ました。

世界中のアーティストやデザイナーの活動を通し、本市に、新しい価値、産業を生み出すための場をつくり出し、世界に発信したいと考えて実施したこの事業も、今年度は、ウェールズからのジョーネッド・ヒューズさん、タイからのタワチャイさんとアンクリットさん、ドイツからのカトリンさんに本市にお出で頂き事業を行いました。

3年という期間をかけた、被災地に於けるアーティスト・イン・レジデンス事業の最初の段階はひとまず終わり、次のステップへ向けて新たな取り組みが求められている様に思われます。この3年間、結果的には、まだまだ希薄ではありますが、彼らの活動により、本市に『種』が蒔かれた様に思われます。そして、これからの取組みは、その『種』から芽が出るためにはどうすれば良いのかを模索して行くことだと思いますので、今後共ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

なつかしい未来創造株式会社  
代表取締役 田村 満

## Foreword

Natsukashii Mirai Souzou Co.,Ltd. (The Reminiscent Future Creation Co.,Ltd.)

Mitsuru Tamura / Chief executive officer

As I have stated previously, our company was established in September in the same year as the Great East Japan Earthquake of March 11, 2011 with the aim of reconstructing the devastated city of Rikuzentakata. Our mission is to revitalize local industry, leave behind positive social capital and create a sustainable town for children 100 years, 200 years from now.

The Artist-in-Residence Program initiated as part of these efforts has, through everyone's support, reached its third year of realization.

This initiative, which has been implemented with consideration to the generation of new values and industry in this city through the activities of artists and designers from around the world, took place this year with the participants Sioned Huws from Wales, Tawatchai Pattanaporn and Angkrit Ajcharyasophon from Thailand, and Katrin Paul from Germany.

The first phase of this Artist-in-Residence Program, which has been implemented within the afflicted area, has now come to an end after a three-year period, and a new initiative is now sought as we move toward the next phase. While still lacking in various respects, I believe the results of the activities of the artists who have participated over the last three years have sown 'seeds' in our city. Future efforts will, I think, focus on searching for a means to make these 'seeds' germinate, and it is in this endeavor that we ask for your continuing guidance.

東日本大震災から5年という月日が流れ、2013年にはじまったこのプログラムも3年を経過しました。いまだ多くの被災者の方々が、日常生活を取り戻そうとする途中であり、一方で被災地に対する人々の関心が薄れ始めていることも感じています。日頃、東京を拠点にしている私は、1年のうち数回にわたり、現地でコーディネーターをつとめるスタッフとの打ち合わせ、滞在アーティストのリサーチの経過報告、成果発表の立会いで訪れますが、その度に、まさに劇的というべき風景に出会い、『復興』という言葉の意味を自分自身に強く問い続けています。こうした変化は2015年になりさらに加速を増しており、まるで近未来を思わせるような巨大なベルトコンベアは徐々にその役割を終え、少しずつ解体、規模縮小がされていきます。並行して、災害復興集合住宅の建設も進み、間もなく仮設住宅への本格的な転居が始まろうとしています。日々の暮らしとともにあった美しい沿岸の風景は、巨大な防波堤によって完全に遮断されてしまいました。自分たちを生かし、育ててきたものへの憧憬、そのよりどころを失った人々にとって、大切な過去の記憶を呼び起こし、現在につながることは、ますます重要になってくるのではないのでしょうか。それは、あまりにも大きな出来事によって分断されてしまった過去と現在、そして未来のつながりを恢復しようとする行為といえるでしょう。

今年のプログラムでは、ショーネッド・ヒューズ(ウェールズ)、木村玲奈(日本)、アクリット・アッチャリヤソフォン(タイ)、タワチャイ・パッターナポーン(タイ)、カトリン・パウ(ドイツ)の5名のアーティストを招へいしました。ヒューズおよびクリエーションパートナーである木村玲奈は、柿内沢鹿踊りの本格的なリサーチと踊りの実践を深め、そのプロセスの成果は東京で発表されました。アッチャリヤソフォンは、アーティストである以前に人間としてこの地域に触れ、地域の人々自らが描いた1000枚の虹の

絵に未来を託す『未来ギャラリー』を作り出しました。パッターナポーンは、2014年に続き2回目の滞在となり、多くの人々との再会を果たし、写真を通じた交流をさらに深めることとなりました。日本での滞在経験豊富なパウは、仮設住宅で暮らす人々の日常と、いまではすっかり日常風景となった大規模な嵩上げ工事との、双方の痕跡を残すドローイングを制作しました。個々の詳細な記録は、続くテキスト、写真をぜひご覧いただきたいと思います。

国、地域、歴史、文化的背景の異なるアーティストたちが記述する過去・現在・未来とは、どのようなのでしょうか。アーティストの多様な視点、行為の中から、この地の人々が自らの生活を見つめることで未来を描く手がかりを見出していただけのをお願いします。そしてまた、この地から遠く離れている人々にとっても、普遍的な問いとして受け止めていただきたいと願います。

末尾になりましたが、本事業へのご支援、ご協力をいただきましたすべての方に、心より御礼申し上げます。

プログラムディレクター・女子美術大学准教授

## 日沼禎子(ひぬまていこ)

1969年青森県生まれ。女子美術大学芸術学部卒業。1999年より国際芸術センター青森の設立に関わり、2011年まで同学芸員としてアーティスト・イン・レジデンス事業を担当。ARTizanプログラムディレクター、アートNPOリンク理事(AIRネットワーク準備会担当)。

5 years have passed since the disaster, the program initiated in 2013 marked the 3rd year. Yet it has been on the way to recovering normal life again for the victims, on the other hand I feel that people are losing interest in the disaster area, it's getting lost. For me based in Tokyo, visiting Rikuzentakata several times in a year to meet with our local coordinator, to see residency artists' progress and their presentations; each time I am faced with drastic landscape changes and keep questioning deeply the meaning of the word 'Reconstruction' to myself. As it turned 2015 the transition was getting faster and the conveyor belt, which appears to me as a futuristic machine has almost finished it's work and will be pulled down, reducing the plan. Construction of restoration housing made progress in parallel, re-housing people into them will begin soon. The Beautiful scenery that was seen there, now completely shut down by an enormous sea wall. A longing for that which had nurtured and held them, the people who lost this scenery, it could be increasingly more important to awaken precious memories and connect to the present. That might be called an action to recover connection from the past, divided by its too huge incidents, connecting back to the present day and forwards into the future.

This year's program invited 5 artists: Sioned Huws (Wales), Reina Kimura (Japan), Angkrit Ajchariyasophon (Thailand), Tawatchai Pattanaporn (Thailand) and Katrin Paul (Germany). Huws has progressed further in serious research and practice of Kakinaizawa deer dance with her creation partner Reina, the fruits of process were presented in Tokyo. Ajchariyasophon stayed as a human more than being an artist and opened 'Future gallery' showing 1000 drawings of rainbows by citizens, their and his hopes for the future. Pattanaporn stayed for the 2nd time, met friends again and continued deep interactions with people through photographs. Paul, who has rich experiences of staying in Japan, made 2 types of drawing, stained traces from the daily life of people living in temporary housing and from the huge construction sites, which has become the normal everyday Landscape. I'm delighted you can follow each artist's text and pictures in detail.

What is the form of the past, present and future, depicted by artists who have different backgrounds of culture, region, history and country. I wish everyone could find clues to draw a future by looking into their own lives, through artists' practice and point of view. Moreover, I wish for everyone who lives even far away from here, it could be embraced as a universal issue. Finally, I would like to express our deepest gratitude to all of those supporting and helping our program.

Program director

## Teiko Hinuma

Associate professor of Joshibi University of Art and Design.

Born in 1969 in Aomori Prefecture. Graduated from Joshibi University of Art and Design. In 1999 she was involved in the foundation of Aomori Contemporary Arts Centre, serving as curator for the Artist in Residence program until 2011. She is program director of ARTizan, and director of Arts NPO Link (head of AIR Network Preparatory Council).

01… 主催者挨拶

02… プログラムディレクター挨拶

06… 滞在アーティスト①

## ショーネッド・ヒューズ

【アーティストエッセイ】陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラム 2015  
【クリエイションパートナー木村玲奈エッセイ】『踊りーダウンズーダンス』を振り返って

16… 滞在アーティスト②

## アングリット・アッチャリヤソフォン

【アーティストエッセイ】決して忘れない

20… 滞在アーティスト③

## カトリン・パウル

【アーティストエッセイ】もどることのない取り巻く時間、それを待ち望みながら  
【アーティスト作品コンセプト】永遠の循環 ぐるぐるぐる

28… 滞在アーティスト④

## タワチャイ・パッターナポーン

【アーティストエッセイ】共有し学んだこと

34… アーティストプレゼンテーション

36… 展覧会の記録

38… アーティスト滞在記録

01… Greeting from the Organizer

02… Introduction from the Program director

06… Sioned Huws

Artist Editorial: Rikuzentakata Artist in Residence Program 2015  
Creation Partner Reina Kimura Editorial: Reflection on Odori-Dawns-Dance

16… Angkrit Ajchariyasophon

Artist Editorial: Never forget

20… Katrin Paul

Artist Editorial: Encompassing time, never to return. I am looking forward to it.  
Works Concept: Eternal recurrence rund und rund und rundherum

28… Tawatchai Pattanaporn

Artist Editorial: Sharing and learning

34… Presentation of Artists

36… Rikuzentakata AIR 2015 Exhibition

38… Artists Visit Itinerary





Sioned Huws

# シヨーンネツド・ヒューズ

シヨーンネツド・ヒューズ／ウェールズ／振付家、ダンサー

## 陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラム2015

### 踊りーダウンズーダンス 踊りを通じた国際的な対話、 東北、関西、そして関東

7月の東京、女子美術大学の学生との活動を始まりとして、幾人かの振付家との対話、コミュニケーション、伝統芸能、コンテンポラリーダンス、日々の環境の中の身体芸術としての、私たちのプロジェクト『踊りーダウンズーダンス』が始まった。その学生達は後に、森下スタジオでの11月のワークショップと、12月のプレゼンテーションに参加。そこで彼女たちは、それらに参加することによって直接的にパフォーマンスアーツの文脈を経験し、陸前高田と住田町から来た2人のゲストである吉田信孝（柿内沢鹿踊）と菅原みき子（陸前高田音頭）から地域の芸能と国際的な芸術のコラボレーションとして、知識と経験を共有した。

### 岩手県、陸前高田と住田町の夏

8月、山と海の暑い湿気を感じる。松林の甘苦い香り。人々が世話をしている花壇や、庭、田んぼのその色を知り、コオロギ、蟬、蛙の鳴く高低さのある調子、様々な音色を聞く。夏の鹿

の鳴き声は人の声に似て鳴り響き、それは優しく耳に届く。そして日が夜へと変わるときには、音も無く、光った螢が音楽のように消えたり現れたりしながら、杉林の垂直線の中に彷徨っている。緑の色彩、一面の海、矢作と小友町の若い稲、この9月という季節には、米の粒は黄金の影を实らせる。小友町では2015年が、2011年以降初めての収穫であった。ひとつの復興への目安として、そして祝うべきものとして、緑は黄色へと変わる。陸前高田フォークダンス『ともしの会』によって『御祝い』が踊られた。

### ともしの会—To keep fire burning

8月に来日し、私にとって初めての東北の夏の経験は、青森津軽手踊りにインスピレーションを受け続けた、その8年間の雪で覆われた冬の後の、3度目の陸前高田滞在となった。お盆と七夕祭の時期の、踊りによる再会。人々が静かに歓迎の準備で忙しくしているその期間は、通りや山車が提灯で飾られる。そう、魂が家路を見つめることが出来るのだ。大声で「よーい、

Gongen Sama Azumara Shrine Sumida 1/1/2016



よい」と太鼓と笛が、人々を鼓舞する。夜には、山車の光は歩みに合わせて動き、ひとつの地区の山車が他のものに出会う。不調和な調子と不調和な調子と音程、調和、そしてその中間のすべてがあった。この自然界は、工事現場の無作法な高上げの山や機械音よりも、高らかに歌い、光り輝く。文化はこの土地に長い間生きてきた。竹駒食堂の近くの陸前高田のこの地面の上で、私が共に踊った柿内沢鹿踊は、反復する一つの儀礼で、世代を受け継ぎながら、繰り返しの習慣行為で、特定のだれに属することなく、未だにあるものから違う者へと、その出会いに委ねられている。2匹の白い雀の羽先が触れ合っているのを、柿内沢鹿踊の衣装に見ることが出来る。

### 雀—Sparrow 信心と名誉の象徴

柿内沢鹿踊をすべての装束で踊るとき、牡鹿の角、太鼓、ささら(3mを越える竹の棒)を含め、15~20kgの重さを背負うことになる。いかにその踊りのフォームの善し悪しを知っているかなど関係なく、その瞬間は予期せぬことが起き



Matsu - Pine tree  
Kireta Gaiwai

る。ささらは右へ左へと揺れ、時には他の踊り手と絡まる。まだ私の身体感覚は驚くほど軽く、鳥が飛ぶところ（白鷺）と大地を跳ね回る動物がいる場所（鹿）のどこか中間のようだ。

- \* 白鷺 - White Heron - 穀物を遠い地からもたらして、稲作を始めたきっかけとなったとされる神聖な鳥。また幸せの鳥としても知られる。
- \* 鹿 - Deer - 神道では神使として考えられている。
- \* 獅子 - 神話中での「神」の生き物。正確な定義はない。
- \* 神 - Kami - 聖なる本質として、いかなる形を取ることが出来る。

私はよく、昔の世代の踊り手が踊っているときには、歌のイメージを内包していると思われ。私たちは、今日のコミュニティや社会に関係している、生きることのその態度としてのイメージをよく話し合う。

鹿の子 - 奥の御山 (歌)  
奥の御山の細筋竹 よれて絡まる ばりりはなれろ ばりりはなれろ

そして昨年秋、地元の踊り手達と稲刈りをしていたときに、背骨を丸める身体の使い方を教えてもらった、それは猫背という。低い体勢で、膝を曲げ、同じ動きを繰り返すことでリズムを維持する。私たちは、よく畑に盗

み食いに来る鹿や、彼らの左から右、右から中央に動かす面白い頭の動き、驚異的な視覚と聴覚、人の存在を感知したときの逃げ足などについて話した。これが私の学びの過程で、柿内沢鹿踊の様々な断面が現れる瞬間だ。時には我々は米が、スーパーマーケットからただやってくのではないと思いたす必要がある。

- \* 神道の考えでは、収穫や種まきの時期などの、その時期ごとの継承性が重要とされる。
- \* 鹿踊は、農民の民話信仰からやってきたという考え方もある。
- \* 私の信念として、ミーティングでは直接、顔と顔を合わせ、人が会って話すことが重要であると思うが、それは予期しない所へと導き、常に人と場所とともに、ダンスの創作過程がある。

東峰山から住田を、目が届く限りできるだけ遠く、草や木を見渡していく。自然は常に、私がダンスにおいて考えることよりも大きな枠組みで存在している。なにかこの場所のなかに既に存在しているのか見極めようとする。風景、海岸線、地域性、その日々、複雑なコミュニティの構成、原始から儀式的になった文化、伝統から現代までの時間、起源、文化の基盤、コミュニケーションとしての芸術。これは私の外国人としての興味ではなく、私はウェールズでも同じように、ダンスと環境の関係性、その文化の背景や培われてきた方法、物語を調査してきた。

私たちが何者であるかを価値付けるために。ある物事がどのようにこの世界で芸術としての価値を見いだされるのか、それは個人の判断なのだ。私が柿内沢鹿踊を踊る時、私はその場所の中へと消えていく。

### 陸前高田音頭 (盆踊り)

60年前、竹駒、気仙、長部、小友、米崎、広田、矢作、横田の8つの町がひとつになった時にこの歌は書かれた。陸前高田音頭は、この8つの小さな地域をもう一度距離を縮め、私たちの世界の調和のためのメタファーとなった。私たちの踊りの輪は集中的に、そして国際的に、広くなりつつある。去年はChapter Arts Centre、Cardiff UK、神戸のDance Box、東京の森下スタジオ、米崎コミュニティセンターで純粋に人々の美しさが踊られた。地域を価値付けることで、世界はそれを大切にするだろう。

もし秋葉神社に訪れることがあれば、中には大名行列舞の道具があるだろう。海と山より、若者による行列をつくる踊り。2013年に米崎コミュニティセンターでその絵を見たことで、たくさんのお会いと理解をもたらした。最後に踊られたのは2008年で、その道具のすべては若い踊り手の、その手によって投げ合い、渡され合う。きっとまだその何かが変わらずに残されていることだろう。

ある時、ヘアーサロンKAZに行った後、陸前高田竹駒町のローソンでひとりの友達に出会っ

た。彼女とは知り合って3年になる。彼女は「新しいアパートに住んでの」と言った。(最近仮設住宅から引っ越したばかりであった) 私は「そこはどう?」と聞いたが、返事の言葉はささやかなものだった。家とは、4つの新しい壁以上のものことなのだ。

陸前高田と住田町、岩手

山と海があるその2つの地域は互いに、またはダンサーとしての私にも、私たちの文化と芸術を共有することにおいてそのような援助を与える。住田の人々は、もしかするとウグイスに似ているかもしれない。小さくて恥ずかしがり屋な小さな鳥は、なかなか見つけることは難しく、春のさえずりとして知られている。さらにウグイスは、桜に作ったその巣を見られたときには怒るだろう。その様子は、柿内沢鹿踊では、ひとつの感情へと変容する歌になった。

私たちが『山』と呼ぶ場所で、ある友達と夢に向けて仕事をしている、一步一步、少しずつ明るく、日々を繰り返しながら。

### 踊りーダウンズーダンス 神戸、東京、宮城

森下スタジオ、女子美術大学、Dance Box、塩竈市杉村惇美術館

東京森下スタジオでの2週間は、蓄積された経験を発展させるための場として、2名の岩手からのゲストと、観客たちもプレゼンテーション

に参加した。思考することを必要としないこの踊りは、どのように世代から世代へと受け渡していけるのか?

いれは Wings Coming 口唱歌  
ザン ザン ザン ザン ザゴイゴザン  
ザン ザン ザン ザン ザゴイゴザン

### 制作途中の新しい創作

4人のダンサーの共振する太鼓のリズムを唱える声、動き続ける4人、普段とおろ歩く人々はそのパターンの中を通り抜けていく。片足を少し前に出し、10まで数える (これは、私たちが小さい頃ははじめに10まで数え上げることを学ぶからだ)。我々は、歩くのには慣れていますが、それぞれ歩き方は違うものである。

くちしょうが 口唱歌とは、一定の規則に従って、楽器が演奏する旋律を、演奏の情報を含めて、声に出して歌うための体系を言う。(Wikipedia)

柿内沢鹿踊には、見たこと、聞いたことのないものが沢山あり、神秘を孕んでいて、私は少しずつつそれらを解き明かそうと試みている。そのひとつは口唱歌で、踊り手は何度も記憶の中でその音を静かに暗唱し、踊りの最中にも暗唱する。なので、太鼓を叩いて踊る間、動きや太鼓のタイミングがなくとも、つねにその行間に注意を払っている。さらに、白い鹿の話があり、のちに定かになったのだった。

今のところは、そんな鹿人 (human deer) は神戸、東京、塩竈には少ししかいないようだ。きっと何かの折りには、あなたもその「ザンザンザンザンザゴイゴザン」という音を聞くことができるかもしれない。鹿踊の起源は不明で、そのようにやってきたのかは分かっていない。子供が鹿の角で遊ぶ姿を見て (森の中で沢山見つけることができる)、この遊びから発想を得て作られた、という説がある。遊びには、子供が素直な心で、彼らを取り囲む自然への洗練された理解がある。

鹿踊の歌詞  
遊べ へい わが連れ

木村玲奈、逸舟藩、藏元撤平、神村恵、長屋耕太、森田理沙、安藤暁子、清水穂奈美、菅原みき子、吉田信孝、ワークショップの参加者、女子美術大学の学生、Dance Boxの生徒、葛西恵、はな、あかり、山下残、塚原裕也、川口隆夫、岡田利規、羊屋白玉、山縣太一、手塚夏子、藤原ちから、以上の方々に、対話を積み重ね、新しい創作をつくり上げ、Odori-Dawns-Danceをこれから2年間、日本(東北、関東、関西)、オーストラリア、ヨーロッパで特徴付けていくためのご協力を頂いた、感謝を。

### 踊り

東京から、陸前高田の人々の見慣れた顔の元へと帰って来る。2015年12月27日の米崎コミュニティセンターで、氷上太鼓、ともしの

会、大村圭と恵世、柿内沢鹿踊、木村玲奈、田仲桂、その他ゲストとともに。私とその純粋な形式においての踊りとして伝えることができるのは、それはあの場所にいたそれぞれすべての人々が疑う余地もなく、自我をどこかに振り払い、共にいることの純粋な喜びで、それぞれ個人が、言葉にはできないことを共有したということである。

踊りは、実際に感じられる、生活と生きることに関係した祝いなのだ。

## 2016 新年

### 権現様 – Lion Dance 1st January

東峰神社と白山神社

権現様の山の化身が各家を訪れ、悪いものを追い払い、加護と繁栄をもたらす。それは各人の家、人のもとに直接やって来て、その金色の菌をカタカタ鳴らしながら、祝福を約束し、まさに彼らの頭を直接「嘯む」のである。陸前高田と東峰部落のコミュニティは、友人やダンサーや、アーティスト、もちろん私も、この美しい地域に快く迎え入れてくれるだろうと私は思う。この踊りが生活の中に息づいている地域に。

ここ、山崎の家(屋号)の窓から外を見れば、そこにあるのは奥の御山、ぼらりはなれろ。

陸前高田七夕祭り – 8月7日

陸前高田と住田等のお盆 – 8月15 ~ 22日

花巻鹿踊のお祭り – 9月12日

住田町権現様 – 1月1日



ヒューズによる柿内沢鹿踊の振り付けをよく理解するための覚え書き。このドローイングは『遠入派』という踊りのパート。

A note Huws drew to get better understanding of Kakinaizawa Deer Dance, its choreography, which refers particularly a part of the dance 'Toireha - Wings arriving from afar'

Sioned Huws / Wales / Choreographer, Dancer

# Rikuzentakata Artist in Residency Program 2015

## Odori-Dawns-Dance

### An international dialogue through dance, Tohoku, Kansai and Kanto

July in Tokyo, an introduction with Joshibi Arts University students, opening a conversation, our physical arts as communication, traditional, contemporary dance and our everyday environment. Students later joined workshops in November and a presentation at Morishita Studios in December, where they experienced first hand a performing arts context based on participation, meeting two guests from Rikuzentakata and Sumita Town, Iwate, sharing their knowledge and experiences of local traditions and international arts collaboration, Mikiko Sugawara-Rikuzentakata-Ondo and Nobutaka Yoshida-Kakinaizawa Shishi-Odori Deer Dance.

## Summer in Rikuzentakata and Sumita Town, Iwate

August, to feel the humid heat of mountain and sea air, a bitter-sweet smell of pine forests, to experience the colour of flower fields, gardens and rice fields planted by human care, to hear sound, tones, low and high pitches of crickets, semi and frogs, the call of the deer in summer resembles that of the human voice, sound of streams gently touch the ear and as day turns into night the soundless glow of fireflies, intervals fading and appearing as musical notes between the vertical lines of cedar trees.

Hue's of green, a sea of fields, fresh young rice plants of Yahagi and Otomo, the month of September, rice pearls ripen to a golden shade; Otomo rice fields 2015 first harvest since 2011, green becomes yellow, a measure of recovery, a reason to celebrate. Hirota Goiwai (Hirota Celebration) danced by Tomoshinokai, Folk Dance Group.

Tomoshinokai - To keep a fire burning.

Arriving in August my first experience of summer in Tohoku, after eight years of snow covered winters, the inspiration of Aomori Tsugaru Te-odori, this my third visit to Rikuzentakata, a dancing reunion, during Obon and Tanabata Festival, a period when persons are quietly busy in preparation to welcome, streets and carts decorated with lanterns, so the spirit can find its way home. Loud calls "Yoie Yoie" taiko (drum) and flute, encourages an incredible human effort, and at night a glow of colour, moving at the pace of walking, one tanabata meets another; notes and pitches of discord and harmony and everything in-between.

The natural world sings louder, shines brighter than the sound of hammering, the colour of processed soil in the making of false mountains. Culture has lived in this land for a very long time. Dancing with Kakinaizawa Shishi-Odori, Deer Dance, on the ground of Rikuzentakata near Takekomashokudou, a ritual in repetition, passed on from generation to generation, it belongs to no one person, yet relies on the meeting of one with another. Two white sparrows, wing tips touching a print on Kakinaizawa garment.

Suzume - Sparrow

A symbol of devotion and honour

When I dance Shishi-Odori in full dress, curved deer antlers, taiko (drum) and 'sasara' (bamboo poles over three meters high) my body carrying a weight of between fifteen and twenty kilos, no matter how well one knows the form, at the moment of dancing comes unpredictability, 'sasara' sway left and right sometimes tangle with another deer dancer. Yet my

physical senses is of incredible lightness, somewhere between a bird in flight (shirasagi) and that of an earth bound creature (deer)

\*Shirasagi - White Heron - were regarded as divine birds which started rice - farming bringing grain from far away; known as the bird of happiness.

\*Shika - Deer - are considered messengers to the gods in Shinto

\*Shishi - a mythological 'kami' creature, not clearly defined

\*Kami - refers to a sacred essence that can take shape in many forms.

I'm often reminded by the older generation of dancers to retain image of song while dancing; we discuss image as attitude of life, relevant to today's community and society.

Kanoko - Fawn

OKUNO MIYAMA (song)

Far Away Mountain

Far away mountain, narrow fiber of bamboo

They become tangled, let it release itself

let it release itself

(barari - is sound of something releasing)

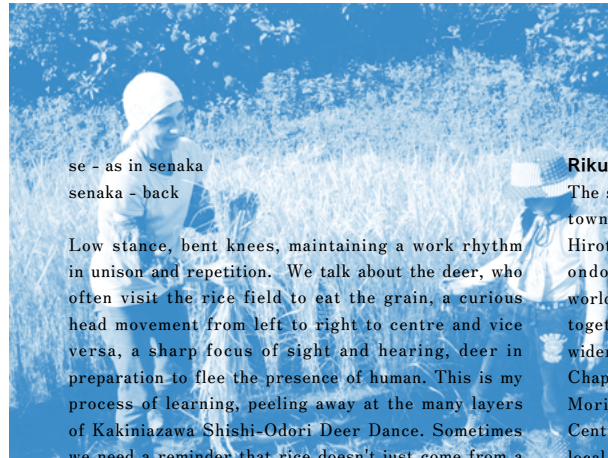
Okuno Miyama no hoso suji take

Yorete karamaru barari hana rero

barari hana rero

And while working the rice fields last autumn, together with local dancers, discussing a way of body, a curved back (spine) - nekoze

neko - cat



se - as in senaka  
senaka - back

Low stance, bent knees, maintaining a work rhythm in unison and repetition. We talk about the deer, who often visit the rice field to eat the grain, a curious head movement from left to right to centre and vice versa, a sharp focus of sight and hearing, deer in preparation to flee the presence of human. This is my process of learning, peeling away at the many layers of Kakinazawa Shishi-Odori Deer Dance. Sometimes we need a reminder that rice doesn't just come from a supermarket.

\*Shinto belief in the importance of the seasonal succession of seedtime and harvest.

\*Shishi-Odori a mythology coming from agricultural folk believes.

\*My belief in the importance of meeting face to face, person to person, arriving to somewhere unexpected, always with a person and a place, a process of dance making.

Looking down from Azumane Mountain (East Peak) towards Sumita Town, grasses and forests as far as the eye can see. The natural world has always been the larger frame for my dance thinking; I choose to look towards what already exists in a place, landscape, a costal outline, locality, the every day, structure of community it's complexity, culture from primitive to ritual, traditional, to contemporary, an origin, a cultural foundation, art as communication. This is not my interest as a foreigner; I have researched in this same way my own Welsh cultural background and upbringing, the relation of dance to environment, its story, to value who we are. How one places that out in to the world as artwork is an individual choice. When I dance Kakinazawa Shishi-Odori Deer Dance, I disappear into the environment.

引退した柿内沢鹿踊の踊り手のひとりに頼まれて、稲刈りを手伝うヒューズ。

Huws helped a rice harvest for one of the deer dancer in older generation in kakinaizawa.

### Rikuzentakata-ondo (bon-odori dance)

The song words written sixty years ago when the eight towns, Takekoma, Kesen, Osabe, Otomo, Yonezaki, Hirota, Yahagi and Yokota became one. Rikuzentakata-ondo, has become my metaphor for accord in our world, to bring these eight smaller communities closer together once again. Our dancing circle is becoming wider, concentric and international, last year danced at Chapter Arts Centre, Cardiff UK, Dance Box, Kobe, Morishita Studios, Tokyo and Yonesaki Community Centre, simply the beauty of people dancing. To value local, then global will take care of itself.

If you visit Akiba Shrine, inside are the tools of Daimio Gioretsu Mai, a processional dance bringing young men from mountain and sea together, I saw a painting in Yonezaki 2013, it led to many meetings and understandings. Last danced in 2008, these tools passed through each and every hand of young men who danced, a remembrance; something's should be left untouched.

The other day after a hair cut at Hair Salon KAZ, Takekoma, I met a friend in LAWSON Rikuzentakata, we've now known each other for three years, she said "I'm now living in a new apartment" (recently moved from temporary housing) I asked "how is it?" she said very little. 'Home' is so much more than four new walls.

Rikuzentakata and Sumita Town, Iwate

These two communities from mountain and sea have shown such support towards each other and towards me as a dancer in sharing our arts and culture, ice cream and coffee. Sumita people are rather like the uguisu - a tiny shy bird that you rarely see, known for its spring song. Even uguisu gets angry at losing its nest from the sakura tree, transforming emotion into a song. Sakura - Cherry blossom

And with a friend at a place we call 'Yama' working

towards a dream, step by step, stone by stone, day by day.

Yama - Mountain

### Odori-Dawns-Dance

Kobe, Tokyo, Miyagi

Morishita Studios, Joshibi Arts University, Dance Box and Shiogama Sugimura Jun Museum of Art.

Two weeks at Morishita Studios, Tokyo, a space to process accumulated experiences with others, two invited guests from Iwate and a participating audience; dancing without thinking, how is it passed on from generation to generation?

Ireha - Wings Coming

Kuchi shoga

zan zan zan zan zago-i-go zan

zan zan zan zan zago-i-go zan

A new creation in process

Voices of four dancers resonate as drum beats, four figures in motion, all walks of life pass through this pattern, one foot in front of the other, counting by ten (because when we are small we first learn to count up to ten), walking is familiar, yet we all walk differently.

Kuchi shōga phoneticizes (that is, phonetically articulates) drum strokes using Japanese sound symbols. Each syllable conveys information about how the drummer is to play a particular note. (Wikipedia)

There is much that is un-seen or heard in Kakinazawa Shishi-Odori, it contains many mysteries, which slowly step by step I attempt to unravel; one is the 'kuchi shoga' each dancer learns and recites these sounds silently by memory, while beating the drum and dancing, without accenting beat or movement, giving attention to the spaces in-between. And then there is the story of the one white deer, to be revealed in time.

By now there are quite a few 'human deer' in Kobe, Tokyo and Shiogama, if you listen you'll hear "zan zan zan zago-i-go zan"

The origin of Shishi-odori, how it came into this world is un-known, one story is that someone saw children playing with deer antlers, (you can find many on the ground of the forest) and from what was perceived of this game, made a dance. At play, children form their own sophisticated understanding of the world around them, an open mind.

Words of Shishi-Odori

Play, let's play my friends

Asobe hey waga tsure

Thanks to Reina Kimura, Ishu Han, Teppei Kuramoto, Megumi Kamimura, Kouta Nagaya, Lisa Morita, Akiko Ando, Honami Shimizu, Mikiko Suguwara, Nobutaka Yoshida, and workshop participants, Joshibi Arts University and Dance Box students, Hana, Akari and Megumi Kasai, Zan Yamashita, Yuya Tsukahara, Takao Kawguchi, Toshiki Okada, Shirotama Hitsujiya, Taichi Yamagata, Natzuko Teduka and Chikara Fujiwara, an accumulating dialog, connecting up new creation, to be revealed further as Odori-Dawns-Dance continues over the following two years in Japan, (Tohoku, Kansai, Kanto) Australia and Europe.

### Dance

From Tokyo returning to familiar faces in Rikuzentakata. Yonesaki Community Centre 27th



December 2015 with Hikami Taiko, Tomoshinokai, Kei and Yasuyo Omura, Kakinazawa Shishi-Odori, Reina Kimura, Kei Tanaka and guests; what I can only describe as dance in its purest form, each and every person in that room danced without reservation, letting go of self-consciousness, captivated by the sheer pleasure of being together, each individual, sharing what cannot be said in words.

Dance is related to life and living is felt; a celebration.

### New Year 2016

Gongen Sama - Lion Dance 1st January

Azumane - East Peak Shrine and Hakusan - White Mountain Shrine

Gongen mountain spirit, visited each and every home to drive away evil spirit, to bring protection and prosperity, and came into direct contact with each person of each house to bless them directly by "biting" their heads in a promise of protection, clacking it's golden teeth. I thank the community of Azumane and Rikuzentakata so much for welcoming friends, many dancers, artists, and me into this beautiful locality, where dance continues to be a way of life.

Here in Yamazaki looking out of my window, far away mountain, barari hana zero.

Tanabata Festival, Rikuzentakata - 7 August

Obon Rikuzentakata and Sumita Town - 15-22 August

Hanamaki Shishi Odori Festival - 12 September

Gongen Sama New Year Celebration, Sumita Town - 1 January



### ショーネッド・ヒューズ

振付家、ダンサー。1965年ウェールズ生まれ。現在、ロンドンを拠点に活動。1988～1990年マース・カニングハムスタジオ(ニューヨーク)で学び、振付、ソロ活動を始める。2008年から始まった青森プロジェクトでは、石川義野氏(津軽手踊石川流師範)、長谷川三弦会(津軽三味線・民謡)に協力を得て、津軽の伝統芸能である『手踊り』を素材に、床に仰向けで寝た状態で踊るという振付を組み合わせた作品を完成。2011年よりgDA(ロンドン)、Chapter(カーディフ)で発表、2012年 dans festival 2012(シンガポール)、2013年 E45 Napoli Fringe Festival(ナポリ)、Fabbrica Europa(フィレンツェ)等で公演、発展を続けている。

### Sioned Huws

Sioned Huws was born in Bangor, North Wales in 1965. Currently she works as a dancer/choreographer in London. She learned dance at the Merce Cunningham Studio in New York from 1988 to 1990, where she began her choreography and solo performances. In 2008, she was mentored by Ms.Yoshiya Ishikawa, a master of Ishikawa Tsugaru Teodori and also she worked with Tugaruyamisen and Minyou by Hasegawasangenkai. Inspired by what she learned, Huws created a dance in which the dancers perform with back against the floor, incorporating Teodori dance elements with their hands. Her dance was first performed in public at gDA in London and in Chapter at Cardiff in 2011. Since then her dancing style has been performed in several places such as dance festival, in Singapore 2012, E45Napoli Fringe Festival, in Napoli and Fabbrica Europa festival, in Firenze 2013.



# 『踊りーダウンズーダンス』を振り返って

岩手を発つ朝、水沢江刺駅付近は雪。今年初めての雪を眺め、ふるさとの青森を思い出しながら新幹線に乗ったら爆睡。気づけば青空の東京の冬に到着しました。この9日間で得た何かはしっかり身体に残っていて、それを抱えて移動した感覚です。

12月5、6日は、森下スタジオにてショーネッドの新しいプロジェクト『踊りーダウンズーダンス』のワークショップでした。

スタジオの中では動きのリサーチが行われていて、すでにこの新しいプロジェクトを通してたくさんの方に逢ったり、再会したり、人が集っています。それぞれ違うバックグラウンドをもち、違う故郷があり、それぞれの生活もある。そんな色んな人が集うスタジオは一つの小さな世界のような。でも私はそのスタジオが森下の住宅地の中に建ってあることや、南に進めば川があったり、清澄白河へ続いていることを忘れたくないと思うのです。スタジオの中の世界は外の世界に繋がっていて、そしてひとりひとりの故郷や歩んできた道と繋がっている、そう思いながらいつも踊ってきたし、作品を作ってきました。このことはショーネッドから学びました。彼女のつくる作品は、地続きでどこまでも繋がっていくような感覚があります。

ショーネッドがリサーチしてきたたくさんの情報や記憶を何かしらの形へ変化させることはとても難しく、でもスタジオという場所があることで整理がついていく。ひとつひとつ並べて、思い出して、そして選んで、並べて、また並びかえて、やっぱり振り

出しに戻って。そんな2週間でした。なんとも言えない不思議な感覚がありました。うまく言えないのですが「それでも一緒に居る」という言葉が出てきました。

柿内沢鹿踊は、中立(リーダー)の吉田信孝さんに岩手県住田町からお越し頂き、信さんの身体のもつ時間がとても伝わって来て、私とショーネッドで練習していた時とは全く違う時間が立ち現れました。身体に宿っている歴史や時間、リズムがこんなにもその場の時間を変化させるのかと、踊っていて驚きと興奮状態でありました。そして、もうひとりの岩手からのゲスト、陸前高田みんなの家の管理人をなさっている菅原さんと手をつなぎ、陸前高田音頭を歌うショーネッドを見て、私がいつも思っている「些細なことが何かを変えるかもしれない」という言葉が浮かんできました。ウェールズで生まれた彼女が陸前高田で生まれ育った女性と共に手をとって歌っている。そしてその場所は東京の森下。これは何なのでしょう。言葉だけじゃなくて、身体で伝えることを大切にしたい、それこそがダンス。そんな夜でした。

## 踊りーダウンズーダンス

米崎コミュニティーセンターでの交流会

ショーネッドが三年間を通して出逢った方々と共に時間を過ごすことができ嬉しかったです。8年前から続けている青森プロジェクトを通して学んできた津軽手踊りも岩手の方々にご紹介でき、氷上太鼓

さんとの初めてのコラボレーションも試みました。また、昨年のレジデンスでお世話になった福島県いわき市から来てくださった桂さんと共に、じゃんがら念仏踊りも踊ることができました。桂さんの歌声は相変わらず素敵でした。

私の鹿踊の初舞台はというと、悔いなしです。ベストを尽くしました。もちろん反省点や改善点はたくさんありますが、あの場所にメンバーの皆様と共にいたこと、踊れたこと、太鼓を叩いたことが奇跡みたいでした。一体感というのはちょっと違うかもしれませんが、なにか見えない空気をそれぞれが感じながら存在していたように思います。信さん、メンバーの皆様、ショーネッド、本当にありがとうございました。

そして最後に、フォークダンスクラブの方々と共にみんなで輪になって踊ったとき、発見できました。自分にとってのダンスが。忘れることができない瞬間となりました。

会が終わってから、スタッフみんなで作った豚汁、そしてタイからのアーティスト二人が作ってくれたタイ料理、地元の商店から取り寄せた美味しいおにぎりをみんなで食べ、語りました。村上たきこさんという方にお会いし、彼女はなんと私の東京の家の近くでかつて働いておられたのだとか。かなり盛り上がりました。こういう偶然や語らって、今後の自分の視点や踊り、作品にも大きく関わる大切なことだなんてやっぱり感じました。

# Reflection on Odori-Dawns-Dance

Morning to leave Iwate, near the Mizusawa-Esashi Station is snowy. I looked at the first snow this year, I remember Aomori. Then I slept in Shinkansen, arrived in winter of Tokyo, the blue sky. There was something, which I got in these nine days to my body.

It was a workshop of new project 'Odori-Dawns-Dance' with Sioned in Morishita studio on 5 and 6 December.

A research of movement is carried out in the studio, we already meet a lot of people. Everybody has a different background, different hometown, and there is each life. The studio where various people gather is like one small world. The studio is built in a residential area of Morishita, there is a river, when I advance from here to the south, it continues Kiyosumishirakawa. The world in the studio leads to the outside world, connected to each person's hometown and the way, which each person walked. I always dance and make my work while thinking so; I learned this from Sioned. The work, which she makes is adjoining, there is a sense connected forever.

It is difficult to change information and memory that Sioned researched into some form, but rearranging follows, because there is the place called the studio; and we display it one by one, remember, choose and sort it again, and make a fresh start. It was such two weeks. I had the mysterious sense that nobody knew. I could not say well, but the word "for all that we stay together" came out for me. With Nobutaka Yoshida who is the leader of Kakinaizawa-shishi-odori (from Sumita-cho, Iwate), his body had his time, totally different time appeared, I was surprised whether physical history, time, rhythm has changed the time of the place. I watched Sioned joined hands with one of the guest Sugawara-san (Minnano-ie from Rikuzentakata Iwate), and sang Rikuzentakata

Ondo, the words that thought came out. "A small thing may change something" She who was born in Wales takes the hand of a woman born and raised in Rikuzentakata and sings, the place is Morishita of Tokyo. What is it?

As well as words, I want to cherish that which comes with my body, it is dance, it was such a night.

Odori-Dawns-Dance - Rikuzentakata Exchange meeting at Yonezaki Community Centre. I was glad to be able to spend time with the people whom Sioned met through three years. We introduced to people of Iwate, Tsugaru Te-Odori, that we learned through the Aomori Project, continued for eight years and tried the first collaboration with Hikami-Taiko. In addition, to dance Jangara-Nenbutu-Odori with Keisan who came from Iwaki-shi, Fukushima, that was taken care of residency of the last year, the singing voice of Kei-san as wonderful as ever.

My debut of Shishi-Odori, I did my best of course there are a lot of reflection point and refinements, but it was like a miracle that I was able to beat the drum, dance, and I was in that place with everybody. Nobu-san, members, Sioned, thank you very much.

And the last, I discovered a dance for oneself when we danced in a ring together with the folk dance club Tomoshinokai, it is a moment I cannot forget. We ate delicious rice ball, Thai dish which two artists from Thailand made, pork miso soup which we made all together and talked. I met a local woman Takiko-san, she used to work near my house in Tokyo. Talk became lively, I felt that such a chance and talking greatly affects future one's viewpoint, dance and work.



木村 玲奈

ダンサー、振付家。青森生まれ。現在、東京と神戸を拠点に活動中。4歳より踊り始める。2008年より、ショーネッド・ヒューズ「Aomori Project」の日本公演、海外ツアー等にダンサー、共同振付として参加し、今年度もヒューズの新しいプロジェクト「Odori-Dawns-Dance」に継続して参加。国内ダンス留学@神戸(振付家コース)一期奨学生。横浜ダンスコレクションEX2014、トヨタコレオグラフィアワード2014ファイナリスト。城崎国際アートセンター2014年度下半期レジデントアーティスト。踊ること、つくること、生きること、日々模索中。

Reina Kimura

Dancer and choreographer. Born in Aomori, Japan and now based in Tokyo and Kobe. She began dancing at the age of four. She has participated over an extended period in 'Aomori Project' by Sioned Hiws since 2008 performed in Japan, Europe, and Singapore as dancer and co-choreographer. She continued to join in Hiws' new project 'Odori-Dawns-Dance' in this period. In past, she was scholarship student in the choreographer course of 'Study Dance Abroad, At home @Kobe', Finalist of Yokohama Dance Collection 2014EX and Toyota Choreography Award, residency Artist of Kinohashi International Art Center 2014. Exploring dance, creative process, and living day by day.

## Angkrit Ajchariyasophon



アインククリット・アツチャリヤソフォン／タイ／アーティスト、ギャラリーとレストランの経営者

## 決して忘れない

創世記9章：11-16

11 わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なるものは、その洪水によって滅ぼされることなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起こらないであろう。」

12 そして神は言われた、「これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物との間に代々かぎりなく、わたしを立てる契約のしるしである。

13 すなわち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。

14 わたしが雲を地の上に起こすとき、にじは雲の中に現れる。

15 こうして、わたしは、わたしとあなたがた、及びすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた契約を思いおこすゆえ、水はふたたび、すべて肉なるものを滅ぼす洪水とはならない。

16 にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう。」

2011年の地震は、陸前高田の中心街へと猛烈に襲った巨大な津波を引き起こした。こう言えるだろう、その波は日本の地図からこの街全体を

消し去って、悲しみの残骸に置き換えてしまったと。その波は、生き残った人々の記憶の中にもまた深い傷を残した。

将来、繰り返したこのような出来事が起きることを防ぐため、日本政府は山を爆破し、山から土を運搬し、海岸沿いに長い防波堤を建設する計画を始めた。この防波堤は完全に人間を自然から分断している。この計画はこの街の大部分の森の伐採と、山の破壊を必要とする。「自然による災害の後、人によって引き起こされた別の災害を見るために、ここに来た。この街は巨大な波によって消されてしまったが、山と森は人間の行いによって消されてしまった。」と、このように言っていた人もいた。

陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラムから、陸前高田市に40日間滞在するために招待された。その後に分かったことだが、別のタイアーティストであるタワチャイ・バッターナポーンが昨年のプログラムで招かれていた。このプロジェクトの準備をするにあたり、事前に彼のもとを訪れ、バンコクの国際交流基金の援助のもと、私はタワチャイと共に活動することを決めたのだった。

私のプロジェクトは『1000 Rainbows (1000の虹)』である。そこに到着した日より、津波という出来事による、気が沈む場面ばかりを見てきた。天気は寒く、空は分厚く、毎日が暗かった。そしてある日、小雨の後に太陽の光が海に反射した。そして、大きな半円の虹が山の向こうに現れた。それを見たときに私は嬉しい気持ちになった。人は『虹』を見たとき、だいたいそのような気持ちになるのではないだろうか。

その街にはアートギャラリーがなかった。私は未来商店街の中に、陸前高田で初めてのアートギャラリーをオープンさせることを決めた。それは『未来ギャラリー』という。最初の展覧会は、私の考えでは地元の人々の作品が飾られるべきである。このギャラリーのマネージャーとして、私は地元の人々の作品をぜひ購入しようと考えた。そのようにして、私は陸前高田の人々に『虹』の絵を描いてもらうように、お願いしはじめたわけである。

一枚の絵を100円で購入しようとしていたが、ギャラリーが新しくオープンしてより予算を節約する必要がでてきて、それでも、人々に紙やオイルパステルを提供した。目標は1,000枚の虹の絵を集めることであった。(この1,000枚という数は、千羽鶴の佐々木禎子の話から取

り入れた。)

タワチャイの多くの協力も得て、私たちは人々から虹の絵を描いてもらうようお願いすべく、この街の商店をいくらか巡り歩いた。我々は、100円であなたの絵を買わせて欲しいと言ったけれど、彼らはお金を受け取ることを拒んだ。人々は私たちに無料で絵を描くことを喜んでくれた。このようにして、陸前高田の人々から虹を集めることを開始した。その間、いくつかのコミュニティのリーダーや、様々な出会いを通して、沢山のクラブ活動に参加した。そのほとんどは、とても健康で、元気なおじいちゃんとおばあちゃんだった。彼らから、どのように震災をやり過ごし、その恐怖の下で生き延びたのか、喪失、教訓、他者への愛や助け合いなどについて、聞いたり話したりした。

他の田舎の地域と同じように、ここでも若い人々は大きな街でチャンスを掴もうと、外へと出たがるらしい。この街には、ただ牡蠣の養殖とリンゴの木があるばかりだ。この陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラムは観光事業を推奨しようとしている訳ではないが、この地域へアーティストを招へいし滞在することを意図しており、人々と話し、その文化を学んだ。私たちが共に過ごすことによって共有したこと、このすべての活動は、良い関係、良い思い出とともに、人々の大変辛かった時間で満ち溢れている。新しい街は、彼らの美しい過去と記憶によく似た未来のためにつくられてい

くはずである。

「アートは人々に動機を与える」とある人は言うが、しかし私はひとりのアーティストとしてこう信じる「この場所の、美しい心と自然が、アートよりも動機を与える」と。



#### アングリット・アッチャリヤソフォン

1976年タイのチェンライ生まれ。アッチャリヤソフォンは、画家、チェンライのレストラン、そしてギャラリーの経営者である。彼の芸術の手法は、色々な素材を使った彫刻や、ドローイング、写真や抽象絵画など。キュレーションの経験として、2013年に Singapore Art Museum で開催された、開かれたシンガポールビエンナーレの 'Satanni' や2011年の the Bangkok Art and Cultural Centre で開催された 'Chiang Mai Now!' 等がある。'Chiang Mai Now!' は、現代社会の問題と向かい合って探求するアーティストと文化的活動家を介しながら、現代美術と文化を扱った展示であり、問題解決のための代替案や、活発で役立つネットワークのための調査を作品として発表した。またその展示ではタイの現代社会の不均質性、沢山の多様性と考え方の違いを捉えた。

#### Angkrit Ajchariyasophon

Born in Chiang Rai, Thailand in 1976. Ajchariyasophon is a painter and restaurant owner in Chiang Rai, Thailand. His artistic practice revolves around mixed media sculptures, drawings, photography and abstract paintings. His curatorial experience includes exhibitions such as 'Satanni' (Singapore Biennale) at Singapore Art Museum (2013), and 'Chiang Mai Now!' at the Bangkok Art and Cultural Centre, Thailand (2011). 'Chiang Mai Now!' was a contemporary art and cultural exhibition presenting artists and cultural activists who, in their quest to confront contemporary problems, create work that searches for alternative solutions and also actively facilitates networking. The exhibition also captures the heterogeneity of present-day Thai society, full of diversity and differences in ideas.

Angkrit Ajchariyasophon / Thailand / Artist and Owner of Angkrit gallery and a restaurant

## Never Forget

Genesis 9:11-16

11 I establish my covenant with you: Never again will all life be destroyed by the waters of a flood; never again will there be a flood to destroy the earth."

12 And God said, "This is the sign of the covenant I am making between me and you and every living creature with you, a covenant for all generations to come: 13 I have set my rainbow in the clouds, and it will be the sign of the covenant between me and the earth.

14 Whenever I bring clouds over the earth and the rainbow appears in the clouds,

15 I will remember my covenant between me and you and all living creatures of every kind. Never again will the waters become a flood to destroy all life.

16 Whenever the rainbow appears in the clouds, I will see it and remember the everlasting covenant between God and all living creatures of every kind on the earth."

...

Earthquake in 2011 led to Tsunami giant waves, which attacked fiercely into the center of Rikuzentakata city. We can say that the waves erased the whole city from the map of Japan and replaced it with mournful wreckages. The waves also left deep wounds in the memories of those who survive.

To prevent the incident from repeatedly happening in the future, Japanese government started the project of exploding mountains and moved the rocks from the mountains to build a long 'seawall' alongside the beach area. This wall separates human completely from nature. This project required cutting forests and destroying mountains in many large parts of the city. Some say 'after the disaster caused by nature, we came to see another disaster caused by human. The city was erased by the giant waves but mountains and forests were erased by the acts of human'.

I was invited by Rikuzentakata Artist in Residence Program to stay at Rikuzentakata for 40 days. I

later found out that another Thai artist 'Tawatchai Pattanaporn' was invited to join this program last year. To prepare the work in this project, I therefore decided to work together with Tawatchai under the support of Japan Foundation Bangkok.

My project is '1000 Rainbows'. From the day I arrived here, I have seen only depressive scenes from Tsunami. The weather was cold. The sky was thick and dark everyday. Then one day, there was sunshine reflecting the sea after the drizzle rain. And there came a big half circle rainbow right beyond mountains. When I saw it, I felt amazing. I believed everyone feels the same way when they see 'rainbow'.

There was no art gallery in this city. I decided to open the first one at the future market. I called it 'future gallery'. The first exhibition in my opinion should present artworks created by the locals. As a gallery manager, I would love to buy the locals' artworks. I therefore started asking Rikuzentakata people to draw me 'rainbow' pictures. I planed to buy each at 100 Yen. (Since the gallery was newly opened, we needed to save cost however we provided them papers and color pencils). My purpose was to collect 1,000 rainbows. (the number 1,000, I borrowed from Sasaki Sadako's flamingo).

With strong support from Tawatchai, we went around a number of markets and shops in the city to ask for rainbow paintings from the locals. We said we wanted to pay them but they refused to take money. They were happy to draw for us for free. So I started collecting rainbows from people in Ratkuzentakata. Throughout the time we went around to see people and some community leaders, we joined many activities with many clubs. Most people were grandpa and grandma who were very healthy and strong. We talked with them and listened to their experiences such as experiences on how to manage the disaster, how to survive under this frightening circumstances, their losses, their

disciplines, their loves and support for each other.

Like other small cities in the countryside, young people would like to move away to find new chance in big cities. There were only oyster farms and apple trees in this city. The Rikuzentakata Artist Residence Program does not intend to promote tourism but they intend to invite foreign artists to stay with the locals, to talk with them about their life and to learn their cultures. The sharing and all other activities spent together filled up their hard time with good memories and good friendship. The new city is going to be built up with hearts that are ready for the future – the future that looks very similar to their beautiful past and memories.

Some say that "art motivates people" but for me, as an artist, I believe that "beautiful hearts and nature here rather motivate art".



アッチャリヤソフォンは、虹の絵を集めるために気仙朝市の一角にブースを設け、人々に呼びかけた。

Ajchariyasophon's workshops took place at the Kesen Morning Market, to gather rainbow drawings from people.

# カトリン・パウル Katrin Paul

カトリン・パウル／ドイツ／アーティスト

## もどることのない取り巻く時間、 それを待ち望みながら

「2011年の日本の東北の大震災が起きた場所、陸前高田市でのアーティスト・イン・レジデンスに参加することになった。」

普段このような報告をすると、おめでとうという声から、それに対して関心が無いなど、幅のある反応が返ってくるが、今回は違った。一番多かった質問は、「原発事故の放射能は怖くないのか？」であった。

私は自分のために次のようなメモをとった。あの地震と津波は、その他のヨーロッパで起きたものと同じだが、ただ2011年3月11日に福島第一原発の事故が招いた結果はそうではない、と。2015年秋の大多数のヨーロッパの人々にとっては、東日本大震災によって被害を受けている日本の地域という認識はなく、震災の記憶も既に無い。

どうにか、陸前高田に来ることをまずは考え、放射線量を調べてみると、東京の方が陸前高田よりもやっかいなことになっているようであった。それどころか『黒い森』（ドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州にある国立公園）の方が、陸前高田よりも放射線量の値が高かった。

すぐに、陸前高田AIRの定めた期間と条件に承諾したが、しかし私の了解と同時に、疑問も現れてきたのである。

私の作品が、いったい何をその場所にもたすことが出来るのか？ または芸術それ自体が。芸術が震災に対して、やらなくてはいけないこととはなにか？

私の心に浮かぶのは、クリシェ（既に使い古された方法）ばかりであった。文化の再発見、被害を受けた地域の活性化、名ばかりの被災地ツーリズム。発見したブルーノ・ウェーバーの言葉から、より疑念を深めさせた。

「自然が行なう破壊活動は、自然現象の超巨大な力を象徴する。人はその自然現象の慈悲とともに存在する。それらのダイナミックで破壊的な暴力は、理解できるものでも、完全にそれを解き明かすことのできるなにか象徴でもない。破壊的な自然現象の発生によって、アートがその表現をこの領域に達する責務などない。」ただ、アートは目撃者的な視点から、この破壊現象を描写することはできる。

しかし、わたしは自分に課した義務のもとに

立っているわけで、日本へと出発した。事前に準備したりサーチもなく、私はついに陸前高田に到着した。

連なる巨大な盛り土、大地へと伸びる巨大な蛸の化け物のような金属の脚、まるでゴジラ版のような距離感、工事現場の絶え間なく続く騒音は広範囲で起こっていることを印象づける。周りの山々の削られた表面、木のない森、見ることができなくなった海。

しかし、だんだんと津波で破壊された場所と、陸前高田の復興事業の努力によって破壊された場所との区別がつくようになった。その両方は、私に言葉を失わせ、ぞっとさせた。黒澤明の作品『鬼哭』（8話からなるオムニバス映画『夢』の中のひとつ）の風景が頭に浮かんだ。

今ではアートワークが不可能だったと確信できる。私のコンセプトのとれひとつだつて、この災害に立ち向かうことなどできない。

その後、私はいろいろな人々に出会い始めた。陸前高田出身の人々、全てを失った人々、この場所に戻ってきた人々、そして震災後にやって来た幾らかの人々、日本人や外国人、ボランティアや工事作業員。私は彼らの話を聞くなか

で、生活を続けること、新しく始めること、継続すること、そして憶えていることへの欲求があると感じた。そこで、私の作品はその立脚点を見つけたのだった。それが、rund und rund und rundherum という作品である。（ドイツ語で「廻って、廻って、ぐるりと廻る」という意味の言葉遊び）

私が陸前高田を離れた時には、人がもたらしたその破壊にとりあえずは納得することにした。疑う必要性はまだあるし、知ったかぶりする気持を抑えた。私たちは活動的である必要があり、なにも行動を起こさないなんて選択肢はない。もし選択が良いものであったなら、時自体がその采配を決めるだろう。

我々は辛抱強くならなければいけない。分かっている、もう一度陸前高田を訪れなければいけないだろう。それを楽しみにしている。



Katrin Paul / Germany / Artist

# Encompassing time, never to return. I am looking forward to it.

“I will attend an artist in residence program in Rikuzentakata, Japan, an area hit by the 2011 Tohoku earthquake.”

Usually, after announcing such information, reactions range from congratulations to indifference, but not this time. The most prominent question was: “Do you not fear the radiation from the nuclear disaster?”

I made a note to myself: earthquake and tsunami equals for many in Europe only the nuclear disaster from Fukushima Dai-Ichi, which was an result of the earthquake from March 11, 2011. For many Europeans in the autumn of 2015, all other parts of Japan inflicted by the Tohoku earthquake, where no part of perception and memory of the disaster anymore.

Therefore, prior to arriving in Rikuzentakata I researched the radiation levels and found out that Tokyo is much more inflicted than Rikuzentakata. Even the Black Forest had higher levels of natural radiation than Rikuzentakata.

Quickly I agreed to terms and conditions set by the organizers of the Air Rikuzentakata. But as quickly as my YES, my doubts arrived.

What can my artwork bring people in that area? Or art work in general? What has art to do with disaster? Clichés were flying through my mind: Cultural identity, revitalization of the destroyed area, esthetics of disaster, voyeurisms and disaster-tourism to name a few. I found a quote from Bruno Weber that deepened my doubts: *Natural catastrophes represent the momentous impact of the elemental forces of nature. Man is at the mercy of the elements. Their dynamic and destructive violence is neither comprehensible*

*nor can an image reveal it to its full extent. It is not the duty of art to come to terms with a catastrophic natural occurrence by its portrayal.* However, art can depict a catastrophic phenomenon from an eye-witness point of view.

But I stood to my commitment and started my journey to Japan.

None of my research beforehand prepared me with the situation I finally encounter arriving in Rikuzentakata. Large pyramids of earth lining up, metal kraken stretching their legs over the land, looking like a distant relative of Godzilla, constant noise of construction was the predominant impression. Mountaintops shaved of the surrounding mountains, treeless forests, and no glance of the sea. Only slowly I could differentiate the devastation done by the tsunami and the devastation following the efforts of reconstructing Rikuzentakata. Both left me speechless and horrified. Akira Kurosawa's landscape in 'The Weeping Demon' (Dreams) came to mind. Now I was sure that creating artwork was impossible. None of my concepts could survive in view of this disaster.

Then, I started to meet people, many different people. People from Rikuzentakata, people who lost everything, people coming back to the area, and some who came the first time after the quake, Japanese and foreigners, volunteers and construction workers. I listened to their stories, felt the desire to life on, start new, continue and remember.

There my work found its starting point: rund und rund

und rundherum

When I left Rikuzentakata I was reconciled with the destruction human did bring. The need to judge and know-it-all was tamed. I understood the need to be active, and that Not-Doing-Anything, was not an option. Time will be the judge, if the chosen option was a good one.

We have to be patient. I know, that I have to revisit Rikuzentakata in the future. I am looking forward to it.



パウルの陸前高田市内での展示風景。滞在中コンテナを作業場として借り、最後はそこで作品を展示した。

An exhibition by Paul in Rikuzentakata. She rented a prefab space for her studio while she stayed and in the end showcased her paper works.



## カトリン・パウル

引っ掻き 擦り 磨き 汚し  
噛み 東ね 叩き 茹でる  
燃やし 切望し 結び 腐る  
詰め込み 放り出し 振り回す  
それを擦り その中では  
展 鋭い drill (ドリル、教訓) を投げつける  
待て あなたのその時を  
真ましく くしゃくしゃにして  
決して転ばぬように

これはカトリン・パウルによる、紙の研究でのアプローチの詩的な概略である。カトリン・パウルは、メディアアートの学位と多摩美術大学の博士号を持ち、アーティストとしてのキャリアを写真家から始めた。近年彼女の興味は紙にあるが、写真は今まで彼女の創作活動に重要な役割を担ってきた。しかし、他のメディアに対して限界や制限を持っているわけではない。偶然と計算、創造と破壊、繰り返すと始まり、それらが作品制作の過程の中で彼女自身が最も自問することである。現在ドイツを拠点に活動。

## Katrin Paul

scratch scrape scrub spoil  
bite bind beat boil  
burn yearn knot rot  
pack fling swing  
rub it in  
tear throw drill shrill  
wait when you will  
crumple humble  
do not stumble

A poetic summary of approaches Katrin Paul makes within her investigation of paper. Katrin Paul started her artistic career as a photographer. She holds a diploma for media art and a Ph.D. in Art from Tama Art University. Recently her main focus shifted to paper. Nevertheless until today photography plays a key roll in her work, but there are no limits and restrictions to any medium. Coincidence and calculation, creation and destruction, repetition and beginning are questions primarily asked by Katrin Paul during the process of creating work. Now based in Germany.

# 永遠の循環 ぐるぐるぐる

「時間とはひとつの円環である。今までに行なわれた、そしてこれから行なわれるすべてのことは、また繰り返し、繰り返し、行なわれるだろう——永々に。」

TRUE DETECTIVE のキャラクター Rustin Cohle の言葉。(本来の引用は、ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」より)

被災地で作品をつくるということは大きな挑戦である。興味本意や覗き見行為を避ける事は私にとって重要なことであった。

あのような震災の後、何が生き残った人々を突き動かしていたのか。何が直後に必要であったのか。食べ物、避難場所、そしてこれはきっと命に関わる必需品ではなかっただろう、記憶。私は今まで行ってきた仕事の中から、時折行ってきた2つのコンセプトに従おうと決めた。それを私が出会ったその陸前高田の状況に沿って行った。

ひとつの方法は、人が繰り返す日々の行為によって生み出される、日々の兆候と痕跡を記録

する事。それは、必要な日常の繰り返しである。その行為が現在、未来のために、何かを助長し、維持している必要があるかどうかは重要ではない。素材は、お茶の出がらしと、米のとぎ汁。

もうひとつは、例えば雨や雪や煙のような、儂い視覚への私のアイデアを、ここでも継続することができない、無形のものもそれに含まれる。素材は土。

この作品「rund und rund und rundherum」に使われた土は、陸前高田の復興工事をする現場から採取された。その土は、陸前高田の津波で被害を受けた場所の、その周辺の山から運ばれてきている。(その森林伐採と破壊によって、その場所の人々を退かせている。)

私の作業場として借りていたコンテナの近くのお店の経営者、従業員から頂いた、使用済みのお茶っ葉と米のとぎ汁。津波によって流された店の経営者達が働くこの場所では、復興が行なわれるまでの間、仮設のコンテナを店舗や飲食

店として使用する事ができる。私の材料を集めるために、その店を廻って歩くことは、陸前高田アーティスト・イン・レジデンスの期間の私の日課だった。

コンテナの作業場に着いた後は、お茶の葉は紙の上に広げられ、一晩をかけて染みをつける。米のとぎ汁は、紙の上に円を描くように拡げて、その後乾くまで放置すると、この等高線のような跡が残る。

この土を擦り付けた紙は、まず紙の中心に土を置き、手で円を描くような動きをしながら撫でていく。この円の動きは、何度も、何度も、繰り返される。

私たちが何をしているかは問題ではない。私たちはそれを何度も、何度も繰り返すだろう、そう永遠に。ここで、そして今も。



パウルが日々の作業を行うために借りた仮設のコンテナ。  
A temporary studio Paul used working everyday.

# Eternal recurrence rund und rund und rundherum

“Time is a flat circle. Everything we have done or will do we will do over and over and over again - *forever.*”  
**Rustin Cohle in True Dedektiv** (The original quote: Friedrich Nietzsche, From Thus Spoke Zarathustra)  
To make art work in a region struck by disaster is a big challenge. For my artistic approach it is very important to avoid sensationalism and voyeurisms.

After such a disaster, what keeps the survivors going? What is of instant importance?  
Food, shelter and even it might not be a life - threatening necessity, memory.

I decided to follow two concepts I have been working on for some time and adapt them to the situation I encountered in Rikuzentakata.

One approach is the recording of everyday signs and traces that human leave with their repeated daily actions, the immediate sign of being alive - the daily repetition of the necessary.

No matter what - there is the need to nourish and sustain. For the present and the future.  
Material: used tealeaves, the wash water of rice.

Another is the continuation of my thoughts on the visibility of ephemeral phenomena like rain, snow and smoke. Including also the impalpable and intangible structure of thought and memory.

Material: earth

The earth used for the work “rund und rund und

rundherum” was collected from the construction area of the Rikuzentakata Post - Earthquake Reconstruction Site. The earth for that site was harvested from the mountains surrounding the destroyed city of Rikuzentakata. (Leaving them with deforestation and demolition.)

The used tealeaves and the rice wash water I collected daily from shop owners and working persons within a small radius of my studio container. An area where business owners, whose shops were washed away by the tsunami, can use temporary container boxes as shops and restaurants until the Reconstruction of Rikuzentakata is completed. To circle around my studio to collect my material was part of my daily routine during my stay at the Artist in Residency program in Rikuzentakata.

Than, arriving at the studio box, the tealeaves were spread out on paper to leave a stain over night. The rice wash water was spilled on paper in circular movements and was laid out for drying to leave contour - marks of this process.

The polishing of paper with the collected earth started. Earth was placed in the middle of the paper and rubbed into it with circular movements of the hands. The circular movements were repeated over and over and over again.

No matter what we do. We will do it over and over and over again - *forever. Here and now.*

# タワチャイ・パッターナポーン

Tawatchai Pattanaporn



タワチャイ・パッターナポーン／タイ／写真家

## 共有し学んだこと

このエッセイは、私がタイの北東部、アメリカ合衆国の指揮下におかれている地域を旅している間に書き始めたこともあり、その高速道路を走りながら、日本の東北の旅が思い出された。新幹線という、特急列車に乗ったが、タイではこのような電車は今のところ存在しない。私たちの国にあるのはとても遅くて年代的な代物だが、きっと海外からの旅行者にとっては人気がある。日本と比べれば、実際のところ均衡しているとすら言いがたく、だいぶ遅れをとっている。私は本当にこの国を残念に思う。

2011年、東北地方が3.11の地震とその後の津波に見舞われたときには、道路や電車の路線なども含む、東北の構造的な部分が、大きな範囲で深刻な被害を受けた。3.11から約5ヶ月後に、私は初めて東北の被災した地域を訪れたが、あの被害の光景は今でも私の記憶の中に強く残っている。しかし5年目となり、復興の過程も目覚ましく、これは私の予想を越えるものである。この場所では、人の生活を取りもどすために、沢山の活動が行なわれていることを学んだ。近年陸前高田で行なわれているあの巨大な復興工事計画には、何か良いものを未来のために作り得ることを望むばかりだ。

リサーチと写真撮影のための、幾度かの日本滞在の経験はあったが、陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラムにおいては、これまで私が意義づけられてきたこととは何か別の、役割が与えられているようであった。このプログラムは国際的なアーティストを招き、人々と引き合わせ、良い場所、歴史的な場所などを訪れ、市内を巡り、その後アーティスト達は作品の制作段階へと入っていく。誰かに会うためだったり、人々とおしゃべりだったり、場所のリサーチなどの、日々の外出から戻った後には、アーティスト達は陸前高田でのイベントや発表のために意見やアイデアを議論する時間を共有する。新参者としてやって来て、最終的に私たちは、人々にとって馴染み深い顔となり、この場所や風景に慣れ親しむ。

人間それぞれは固有であるが、普遍的でもある。どこの国からやって来たのか、どのような食べ物の違いがあろうが、どのような宗教を信じていようがいまいが、それは関係ない。私たちは美しいものを互いに共有することができる。人々は、その芸術の力を感じ、それに触れることができる。それが、このプログラムに参加し

ていたときに私が学んだことである。

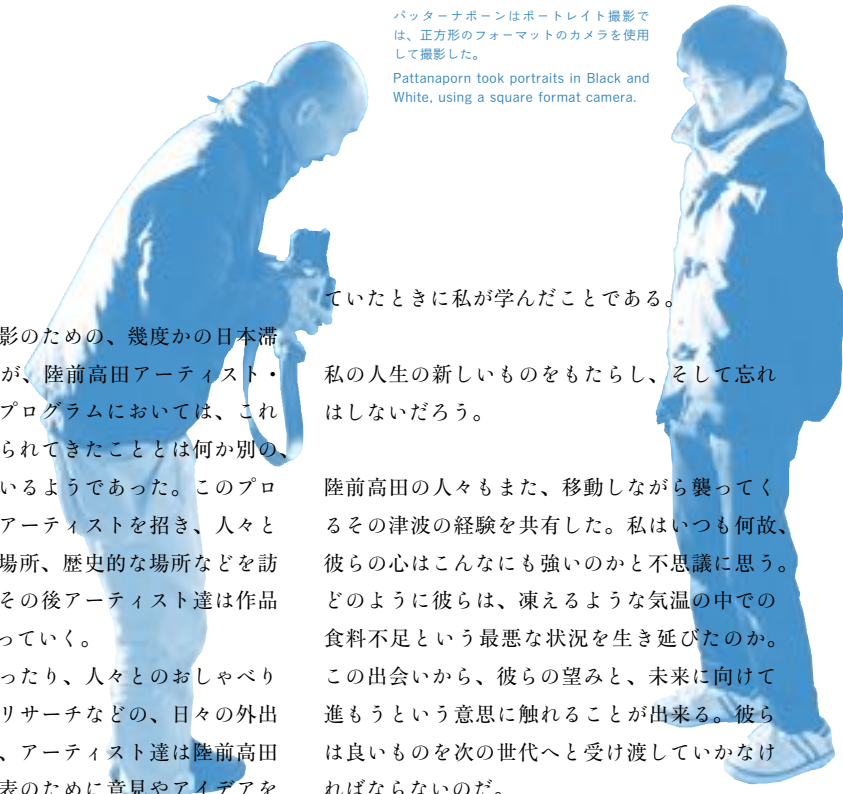
私の人生の新しいものをもたらし、そして忘れてはしないだろう。

陸前高田の人々もまた、移動しながら襲ってくるその津波の経験を共有した。私はいつも何故、彼らの心はこんなにも強いのかと不思議に思う。どのように彼らは、凍えるような気温の中での食料不足という最悪な状況を生き延びたのか。この出会いから、彼らの望みと、未来に向けて進もうという意思に触れることが出来る。彼らは良いものを次の世代へと受け渡していかなければならないのだ。

2014年度では、私は巨大な復興工事によって刻々と変化する風景を撮影した。写真を違った視点で撮影するために、私は工事現場の中へと踏み込んだ。

新しい滞在の2015年度では、私は人々の許可を得てプロジェクトを説明しながら、ポートレイトを撮影した。タイのアーティストであるアンクリット・アッチャリヤソフォンとともに、私たちは商店街や道、カラオケクラブなどを訪

パッターナポーンはポートレート撮影では、正方形のフォーマットのカメラを使用して撮影した。  
Pattanaporn took portraits in Black and White, using a square format camera.





ね歩き、人々と出会った。若い人からおじいさんまで、彼らはとても寛大で、外国人のアーティストのアートプロジェクトへ親切に援助してくれた。みんなどうもありがとう！

それぞれの参加したその年ごとに、芸術について学んだことがたくさんあり、やっと新しい展覧会を人々に対して開くことが出来た。2015年には、『Contour (等高線)』という私の作品の個展、2016年3月にはアンクリット・アッチャリヤソフォンと一緒に同名の『Countour』という2人展。私はその2つの展覧会をとても誇りに思う。そしてその2つが私のキャリアにおいて、他とは違う印として刻まれたことに疑う余地はない。

陸前高田の人は、彼らの生き方を通じて沢山のことを私に教えてくれた。人生は尊いものなのだ。それを救い、日々の生活の中で最善をつくそう。私はなんて人々が美しいのか、どれほど彼らが自分の故郷を愛しているかを感じることが出来る。彼らは絶対に、生きるための新しい街をもう一度つくることのできるだろう。

アーティストとの経験、陸前高田の宿泊していたマイウスの談話室で共に交わした今までの人生で最もクリエイティブな議論。Youtubeのアートドキュメンタリーを見たり、有名なアーティストの主要な作品を互いに見せ合ったり、まるで私は美術教育を受けているようであった。私たちはこの経験を共有し、それぞれの互いの

仕事のコンセプトにフィードバックする。私は現代美術についての知識を拡げることが出来た。特にこの2015年度、ドイツからのカトリン・パウル、タイからはアンクリット・アッチャリヤソフォン、ウェールズからショーネッド・ヒューズ、そして私。私たちは共に行動し、良い友人になった。プログラムディレクターの日沼禎子と、プログラムコーディネーターの松山隼に、この実りある活動を作って頂いた感謝を。

陸前高田の再建がこれからの数年の内に終了し、その姿を見ることができのを楽しみにしてい



### タワチャイ・パッターナポルン

1981年、タイのバンコク生まれ。伝統的なモノクローム写真のスペシャリストであり、暗室を使用して制作する、現像やプリントを愛する写真家。さらにはフィルム写真の保存、写真記事のライターでもある。社会の多様性と複雑さを、写真を使い提示する。作品はモノクロ写真で撮影され、写真作品のドキュメントとしての限定性を露にしている。2014年バンコクの中心に写真スタジオPatani Studioを創設し、伝統的なアナログ写真に専念している。

### Tawatchai Pattanaporn

Born in Bangkok, Thailand in 1981. As a traditional black & white photography specialist and an artistic and hard working photographer who loves developing and printing under dark red light as well as mastering in darkroom technique, photography conservation and article writer about photography. He is enthusiastic to present social diversity and complexity through photography. His work forces the limits of documentary photography through the use of visual and black & white photography technique. In 2014, He founded the Patani Studio in heart of Bangkok, dedicates to traditional analog photography.

る。昔の松原は、海岸沿いの奇跡の一本松近くの新たに作られた場所にまた戻ってくるだろう。嵩上げ地点に作られる、新たな公共施設は日本や海外からの旅行者に魅力的になることだろう。陸前高田にはまた、何度も戻って来たい。そこが、私の故郷と思えるように。そして、私の沢山の友人は今もそこに住んでいる。

Tawatchai Pattanaporn / Thailand / Photographer

## Sharing and learning

I started this essay while I was during the trip to northeastern part of Thailand, driving on the highway, which made under the direction of United States of America. This made me remind of the trip to northeastern part of Japan that I took Shinkansen, the bullet train that have never been existed in Thailand so far. We have only common trains that are too slow and become antique ride, the attractive spot for foreign tourists. Compare to Japan, which actually not even close, we are far fall behind. I truly feel pity on my country.

When eastern part of Japan was hit by the 3.11 earthquake and followed by the big tsunami on 2011 caused extensive and severe structural damage of Tohoku, including heavy damage to roads and railways as well as infrastructures. I first visited the devastate area around 5 months after 3.11, the scene of damage are still too big for my imagination. But on the fifth year after, the recovery process is well managed beyond my prediction as well. I learnt that the numbers of projects have worked on the area aiming to return the ordinary life to people. Even the mega-construction project, which is conducting in Rikuzentakata nowadays, that I really wish it will create goodness for the future.

I gain experiences from travelling to Japan some times for researching or photographing but to participate in Rikuzentakata Artist in Residence Program is something different that I am appreciated. The program invites international artists to meet the people, to visit nice or historical places around the city then each individual do their own process of art.

After daily trip to meet and chat with people, seeing and researching of places, then the artists share the moment of discussion, opinions also the ideas to create the local event or presentation. As newcomer, we eventually

became familiar faces for people, places and also the landscape.

Each human is unique but universal. No matter what the country they are from, the food they have, and the religious they believe or not. We can share beautiful things for each other. People can feel and touch the power of art that I could learn while I was participated the program.

New to my life and could not forget.

People of Rikuzentakata also shared the experiences of the tsunami, which is moving and tough. I always wonder why their minds are so strong. How they survived in the worst situations, lack of foods under freezing temperature. From our meeting I can touch their hope and intention to move forward to the future. They need to pass on good things to the next generations.

On program year 2014, I photograped the rapid transforming landscape cause by the mega- construction project. I accessed inside the construction area to photograph in different perspectives.

On latest year, 2015, I photographed portraits of people by asking the permission and introduce the project. With Angkrit Ajchariyasophon, Thai artist, we walked and met the people on the markets, streets or karaoke club. From young to grandparents, they are so generous and kindly support the art project of foreign artists. Thank you all!

I've learnt a lot in each participated year, for art sake, I could eventually create the art exhibition that new to the audiences. 'Contour' and solo show on 2015 and another

same-name exhibition 'Contour' the duo show on March 2016 with Angkrit Ajchariyasophon. I am quite proud of both events and believe those were another mark of my career.

People of Rikuzentakata have taught me a lot in the way they live. Life is a precious thing. Save it and do your best in daily life. I can feel how beautiful people are and how much they love their hometown. They will definitely recreate the nice city to live.

Regarding to the experience with the artists, the discussions we have together in the lobby are the most creative one I ever have. By screening art documentary from youtube, show each favourite body of works from renowned artist around the world, I can feel I was in the art education. We share the experieces and feedback for each individual body of work. I could expand my knowledge about contemporary art. Particularly on year 2015, we have Katrin Paul from Germany, Angkrit from Thailand, Sioned Huws from Wales and me. We can go together and became good friends. Thanks to program support from our coordinator, Jun Matsuyama and Teiko Hinuma, the program director, for creating this fruitful program.

I'm looking forward to see the rebuilding of Rikuzentakata completely finish in next few years. The pine garden will be back for recreation space beside the miracle pine tree. The nice public space above the zero ground will attract the visitors from all over Japan and international. I would love to visit again and again, as I could feel home in Rikuzentakata and many friends of mine are living here.



## 『Nice Meeting You : あなたにあえてよかった』

日程：2015年12月25日(金)  
時間：9:00-16:00  
会場：陸前高田市竹駒町未来商店街多目的ホール、仮設のコンテナ

アंकリット・アッチャリヤソフォン、カトリン・パウル、タワチャイ・パッターナポーンの3名のアーティストは、陸前高田滞在の成果として、一日限定の展覧会『Nice Meeting You』を開催した。このタイトルは、アーティストたちから陸前高田で出会った全てのものに対する挨拶の言葉である。

アーティストはそれぞれのプロジェクトを発表。アッチャリヤソフォンは、市民と自分の描いた1,000枚の虹の絵を会場に大々的にインスタレーションし、パウルは個展形式のペーパーワークを発表、パッターナポーンは2014年の陸前高田 AIR 滞在時に撮影したフィルム写真を展示した。また、お昼にはタイ料理のグリーンカレーを振る舞った。

### *Nice Meeting You – Anata ni Aete Yokatta*

Date: December 25, 2015 (Fri)  
Time: 9:00-16:00  
Venue: Rikuzentakata Mirai Shotengai Multi-purpose Hall

Artists Angkrit Ajchariyasophon, Katrin Paul and Tawatchai Pattanaporn held the one-day exhibition *Nice Meeting You-Anata ni Aete Yokatta* to conclude their residence in Rikuzentakata. The words in the title are those of a greeting said by the artists to all those they had encountered in Rikuzentakata.

Each of the artists gave a presentation about their own projects. Ajchariyasophon installed 1000 images of rainbows he had drawn together with the town residents, Paul presented works on paper in a solo exhibition, and Pattanaporn displayed photos developed from photographic film taken during his previous stay in Rikuzentakata AIR 2014. In addition, both Thai artists also cooked Thai green curry for all the visitors at lunchtime.



## ショーネッド・ヒューズ プレゼンテーション

日程：2015年12月27日(日)  
時間：10:00-13:00  
会場：陸前高田市米崎コミュニティセンター  
参加団体：Sioned Huws & 木村玲奈、氷上太鼓共鳴会、行山流山口派柿内沢鹿踊伝統保存会、大村圭&恵世(三味線、民謡)、高田フォークダンス『ともしの会』

ショーネッド・ヒューズは陸前高田AIRに2013年より3年間続けて参加し、地域の踊り、文化、コミュニティの研究を続けてきた。彼女の今回のプレゼンテーションでは、3年間をひとつのよい括りとして捉え、今までリサーチで出会った芸能に関わっている団体と個人を招き、それぞれが発表を行なう社会的な場を設けた。当日は、陸前高田のみならずヒューズ氏の友人が訪れ、そのなかの伝統芸能に携わる人もまた、即興での披露も行われた。

### *Sioned Huws Presentations*

Date: December 27, 2015 (Sun)  
Time: 10:00-13:00  
Venue: Rikuzentakata Yonesaki Community Center  
Participants: Sioned Huws & Reina Kimura, Hikami-Taiko-Kyomeikai (Hikami Japanese drum group), Kakinizawa Shishiodori (Kakinizawa deer dance), Omura kei and Yasuyo (shamisen, minyo songs), Folk dance club-Tomoshinokai

Sioned Huws has continued to participate in the Rikuzentakata AIR for three consecutive years since its establishment in 2013, continuing to conduct research into regional dance, culture and communities. In this presentation, as a fitting conclusion to three years of ongoing research she invited groups and individuals involved in traditional performing arts that she had encountered through her research, creating a social platform for respective performances. On the day, Rikuzentakata residents and friends of Huws joined the presentation, which concluded with an impromptu lunch organized by the performers.

### 記事掲載

- 2015年3月：アートNPOリンク発行の冊子「アートNPOデータバンク2014-2015」に、陸前高田AIRのインタビュー記事が掲載。
- 2015年9月15日：岩手県の新聞社、東海新報にショーネッド・ヒューズ氏の記事が掲載。三陸国際芸術祭に、柿内沢鹿踊のダンサーのひとりとして参加したことが特集される。
- 2015年10月：陸前高田AIRがMicroresidence Networkに登録、ウェブサイトに掲載される。
- 2016年1月：ウェブサイト「演劇最強論-ing」のマンスリー・プレイバックに、ショーネッド・ヒューズ氏のプロジェクトの批評が掲載。
- 2016年1月：塩竈市杉村惇美術館の広報誌「ざくろ通信」に展覧会の情報が掲載。
- 2016年2月：広報しおがま2016年2月号に展覧会の情報が掲載。
- 2016年2月：タイのカルチャー誌「a day issue 186」にアッチャリヤソフォンの陸前高田AIRのレポートが掲載。
- 2016年3月：タイのカルチャー誌「a day issue 187」にパッターナポーンの陸前高田AIRのレポートが掲載。

### Articles on media

- March, 2015: An Article of interview of Rikuzentakata AIR program was appeared in book ART NPO DATE BANK2014-2015 published by Art NPO Link.
- September 15, 2015: An article of Sioned Huws was carried in local newspaper Tohkaishimp, which was about Huws's participation in Sanriku international festival as one of dancer of Kakinaisawa Shishi-odori.
- October, 2015: Rikuzentakata AIR program officially took a part in Microresidency Network and available on the website.
- January, 2016: An criticism of Huws's project was on the website Engeki-Sakkyoron-ing (Strongest Theater Theory in English) by critic Chikara Fujiwara.
- January, 2016: Information of Rikuzentakata AIR program exhibition on Shiogama Sugimura Jun Museum monthly magazine called Zakuro-Tushin.
- February, 2016: Information of Rikuzentakata AIR program exhibition on Shiogama city PR magazine.
- February, 2016: Report of Rikuzentakata AIR 2015 by Angkrit Achariyasophon was published in Thai culture magazine 'a day issue 186' .
- March, 2016: Report of Rikuzentakata AIR 2015 by Tawatchai Pattanaporn was published in Thai culture magazine 'a day issue 187' .

2016年2月3日(水)～2月14日(日)  
午前10時～午後5時・月曜休館 観覧無料  
塩竈市杉村惇美術館市民ギャラリー1・2

陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラム 2013-2015 展覧会

## 記憶の風景、なつかしい未来へ アーティストと巡る、陸前高田、そして東北

Rikuzentakata Artist in Residence Program 2013-2015 Exhibition

Landscape of memories,  
traveling around Rikuzentakata  
and Tohoku with artists

3 February Wednesday - 14 February Sunday, 2016  
10 AM - 5 PM, closed on Monday, admission free  
Shiogama city Sugimura Jun museum citizen gallery  
1&2

Artists  
Angkrit Achariyasophon  
Cornelia Konrads  
Haruka Komori+Natsumi Seo  
Jaime Jesus C.Pacena II  
Katrin Paul  
Leo van der kleij  
Sioned Huws  
Tawatchai Pattanaporn

Events  
■ Dance workshop by Sioned Huws  
7 February Sunday, 2 PM - 4 PM, admission free  
Hall of Shiogama city Sugimura Jun museum  
■ Talk session 'To live - in between document and memories'  
Kenji Kai (sendai mediatheque) and Teiko Hinuma  
(Joshi University, Program director of Rikuzentakata AIR)  
11 February Thursday, 2 PM - 3:30 PM, admission free  
Hall of Shiogama city Sugimura Jun museum

【参加アーティスト】  
アングリット・アッチャリヤソフォン  
コーネリア・コンラッズ  
小森はるか+瀬尾夏美  
ハイメ・ヘスース・C・パセナ2世  
カトリン・パウル  
レオ・ファンダークレイ  
ショーネッド・ヒューズ  
タワチャイ・パッターナポー

【イベント】  
■ ショーネッド・ヒューズ 踊りのワークショップ  
2月7日(日) 14時～16時 会場：塩竈市杉村  
惇美術館大講堂 参加無料  
■ トークセッション  
「生きること - 記録と記憶のあいだ」  
甲斐賢治 (せんだいメディアテーク企画・活動支援室長)  
× 日沼禎子 (女子美術大学准教授、陸前高田 AIR プログ  
ラムディレクター)  
2月11日(木・祝) 14時～15時30分  
会場：塩竈市杉村惇美術館大講堂 参加無料



# アーティスト滞在記録

※ Sioned Huws = S Tawatchai Pattanaporn = T Angkrit Achariyasophon = A Katrin Paul = K

7月22日 S / 来日。

7月31日 S / 住田町に滞在開始。

8月7日 S / 陸前高田市の七夕を見学。

8月10日 S / 住田町東峰部落に一軒家を借りる。

8月25日 S / 柿内沢鹿踊のリサーチを再開。

9月12日 S / 花巻まつりで他の鹿踊を見学。

9月13日 S / 三陸国際芸術祭にて、柿内沢鹿踊を踊る。

10月10日 S / 竹駒食堂の3周年記念のイベントにて、柿内沢鹿踊を踊る。

10月15日 S / 東京へ移動。

10月21日 S / 神戸へ移動、下町芸術祭の「街角・みちみちパフォーマンス」に参加。

11月2日 K / 来日。

11月9日 S / 東京へ移動。

11月12日 A / 来日。

11月13日 T / 来日。

11月14日 S / アジア舞台芸術祭 2015 のラウンド・テーブルに参加。

11月20日 A & K / 女子美術大学にてレクチャーを行なう。

11月22-23日 S&A&K / さいたまトリエンナーレイベント「マイクロレジデンシーフォーラム」に参加。

11月24日 T&A&K / 陸前高田に移動、リサーチ開始。

11月25日 T&A&K / 気仙朝市、未来商店街、奇跡の一本松、米崎半島を訪問。ショーネッド・ヒューズ、木村玲奈高田に移動。

11月26日 T&A&K / 陸前高田みんなの家、気仙大工左官伝承館、朝日のあたる家。

11月27日 T&A&K / 嵩上げ工事現場を訪問。

11月28日 T&A&K / 気仙沼のリアス・アーク美術館を訪問。

11月30日 T&A&K / 大船渡を訪問。 S / 柿内沢鹿踊リサーチを、木村玲奈とともに再開。

12月1日 T&A&K / 未来商店街内にコンテナをスタジオとして借りる。それぞれが陸前高田でのプロジェクトを開始。

12月3日 ALL / 水上太鼓共鳴会の練習に訪問。

12月4日 S / 木村玲奈とともに東京に移動。女子美術大学で講義。

12月5日 T&A&K / 陸前高田工事現場説明会に参加。 S / 森下スタジオで創作活動開始。

12月11日 T&A&K / 遠野へ日帰り旅行。

12月15日 T&A / 気仙朝市の会場にてそれぞれプロジェクトを行なう。

12月18日 S / 森下スタジオにてプレゼンテーションを開催。

12月19日 T&A&K / 陸前高田コミュニティホールにて、開催された「クリスマス交流会&ワン・ワールドフェスタ in けせん」にタイのブースに参加、グリーンカレーを振る舞う。 S / 陸前高田へ移動。

12月23日 T&A&K / 住田町の滝観洞に訪問。

12月25日 T&A&K / 気仙朝市でプレゼンテーション「Nice meeting you」を開催。

12月27日 S / 米崎コミュニティセンターでプレゼンテーションを開催。 T&A / 東京へ移動、それぞれ帰国。

12月28日 K / 東京へ移動、帰国。 S / プライベートで滞在、リサーチを継続。

2月7日 S / 塩竈市杉村惇美術館にてワークショップを開催。





公益財団法人セゾン文化財団

東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド



企業メセナ協議会

発行日：2016年3月31日

発行：陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラム2015（なつかしい未来創造株式会社）

発行責任者：日沼禎子

発行部数：300

編集：松山隼

助成：平成27年度文化庁文化芸術の海外発信拠点形成事業、企業メセナ協議会 GBFund（東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド）、公益財団法人セゾン文化財団（一部助成）

協力：女子美術大学アートプロデュース表現領域研究室

寄稿：日沼禎子

翻訳：Jaime Humphreys、松山隼

写真撮影：Angkrit Achariyasophon、Katrin Paul、Tawatchai Pattanaporn、松山隼

デザイン：平野拓也

協力者：

上村勝子、大村桂、大村恵世、大和田加代子、菅野元、木村玲奈、藏元徹平、小森はるか、今野卓也、佐々木ともこ、佐藤真一、佐藤直志、志田美紀、菅原みき子、鈴木萌美、鈴木求、瀬尾夏美、豊嶋秀樹、野口光一、藩逸舟、日沼智之、堀籠敏彦、武藏裕子、村上たき子、森谷奈津子、森谷陽樹、柳下咲子、山内宏泰、吉川由美、吉田信孝、吉田素直、吉永晴彦

朝日のある家、味と人情の鶴亀寿司、岩手県国際交流協会、行山流山口派柿内沢鹿踊芸能保存会の皆さん、けせん朝市の皆さん、塩竈市杉村惇美術館、(ゆ)スタイル、住田町の皆さん、箱根山テラス、パン工房母笑、水上太鼓共鳴会、マイウス・ユニウス、八木澤商店、米崎コミュニティセンター、陸前高田市災害復興事業、陸前高田ドライビングスクール、陸前高田フォークダンス『ともしの会』の皆さん、陸前高田未来商店街、陸前高田ミーティング未来編参加者のみなさん、陸前高田みんなの家、Bricks.808、Odori-Dawns-Dance ワークショップ参加者の皆さん

Published on: March 31, 2015

Published by: Rikuzentakata Artist in Residence Program 2015 by Natsukashii Mirai Souzou Co., Ltd.

Editing in Chief: Teiko Hinuma

Circulation: 300 copies

Editing: Jun Matsuyama

Support: Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2015, Association for Corporate GBFund (The Great East Japan Earthquake Restoration Fund), The Saison Foundation

Cooperation: Field of Art Produce and Museum Studies Department of Cross-Disciplinary Art and Design Joshibi University of Art & Design

Contributor:

Translation: Jaime Humphreys, Jun Matsuyama

Photo: Angkrit Achariyasophon, Katrin Paul, Tawatchai Pattanaporn, Jun Matsuyama

Design: Takuya Hirano

Cooperator:

Katsuko Uemura, Kei Omura, Yasuyo Omura, Kayoko Owada, Hajime Kanno, Reina Kimura, Teppei Kuramoto, Haruka Komori, Takuya Konno, Tomoko Sasaki, Teichi Sato, Naoshi Sato, Miki Shida, Mikiko Sugawara, Megumi Suzuki, Motomu Suzuki, Natsumi Seo, Hideki Toyoshima, Koichi Noguchi, Ishu Han, Tomoyuki Hinuma, Toshihiko Horigome, Yuko Musashi, Takiko Murakami, Natsuko Moriya, Yoji Moriya, Sakiko Yanashita, Hiroyasu Yamauchi, Yumi Yoshikawa, Nobutaka Yoshida, Motonao Yoshida, Haruhiko Yoshinaga

Asahinoataruie, Tsurukame sushi, IWATE INTERNATIONAL ASSOCIATION, Gyozan school Yamaguchi sect Kakinazawa Deer Dance Performing Arts Preservation Society, Kesen morning market, SIOGAMA SUGIMURA JUN MUSEUM OF ART, Style.co, All the person in Sumita town who associated cooperation, Hakoneyama Terrace, Gaganiko, Hikamitaiko Kyomeikai, Maius&Junius, Yagisawa Shoten, Yonesaki community center, Shimizu JV, Rikuzentakata Driving School, Rikuzentakata Folk Dance Tomoshi-no-kai, Rikuzentakata Mirai Shotengai, Rikuzentakata Home-for-All in Rikuzentakata, Bricks.808, International Dance Dialogue project 'Odori-Dawns-Dance'